

# 谷上第1号古墳緊急調査概報



1 9 8 3

広島県教育委員会

甲田町教育委員会

## 例 言

1. 本書は広島県高田郡甲田町字青迫所在，谷上第1号古墳の緊急調査概報である。
2. 現地調査は広島県教育委員会文化課小都隆が行った。
3. 概報の執筆は青山透，小都隆，三枝健二が行い青山が編集した。
4. 出土遺物の整理は，上記の者の他，広島県教育委員会文化課，(財)広島県埋蔵文化財調査センターの協力を得た。
5. 出土遺物の撮影は青山が行った。
6. 第1図は，建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図(安芸吉田・敷名)を使用した。

## 目 次

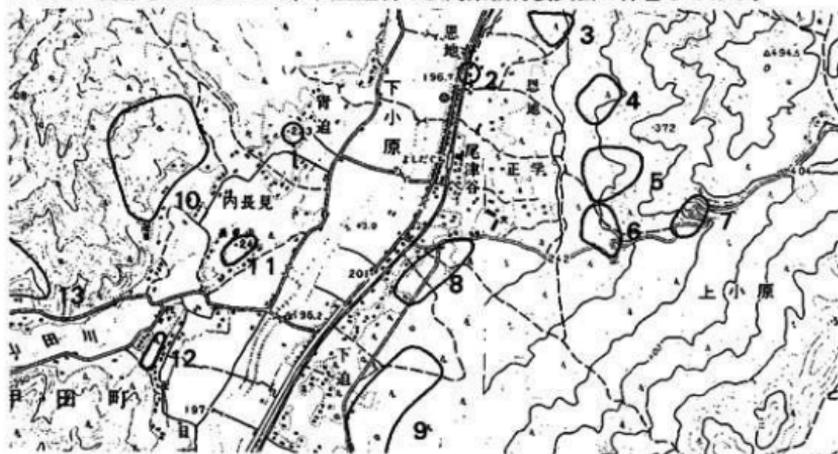
I. はじめに	----- (小 都) -----	1
II. 位置と環境	----- ( ♪ ) -----	2
III. 遺構	----- (青 山) -----	3
IV. 遺物	----- ( ♪ ) -----	4
V. まとめ	----- ( ♪ ) -----	14
付編	----- (三 枝) -----	15

## I. はじめに

谷上第1号古墳は、広島県高田郡甲田町上小原字青迫にある。

昭和55年7月中旬、梅雨明けをつける集中豪雨により、谷上一六氏宅裏山が崩れ、多量の土器が出土した。この被害はただちに甲田町教育委員会に通報され、さらに広島県教育委員会へ連絡された。広島県教育委員会では、7月25日に文化課職員を派遣し現状調査を行った。現地は、掘削による急斜面が豪雨により崩れ、多量の土砂が家屋の背後に流出したもので、その時点では災害復旧のため崩落土の除去が行われていたが、土器類はこの崩落土中に含まれていたものである。このため崩落部分の崖面を清掃したところ、現地表から約3mの高さで横穴式石室の一部を確認した。しかしこの石室はすでに大半が流失しており、側壁と奥壁の一部が残るだけになっていた。このようにこの石室は、保存状況が極めて悪く、また再び災害の起こる可能性も考えられたことから、この石室についてはその場で清掃、写真撮影、実測等の処理を行い、以後の防災工事にも直ちに対応できるようにした。

なお、現在、この古墳は奥壁と側壁の石2枚が、コンクリート擁護壁の上にかろうじてその痕跡をとどめており、出土遺物は広島県教育委員会に保管してある。



1. 谷上第1号古墳
2. 荒神古墳
3. 恩地北古墳群
4. 恩地古墳群
5. 井才田古墳群
6. 尾津谷西古墳群
7. 尾津谷東古墳群
8. 正字古墳群
9. 下迫古墳群
10. 内長見古墳群
11. 長見山古墳群
12. 中山古墳群
13. 山田古墳群

第1図 谷上第1号古墳位置図

## Ⅱ. 位置と環境

谷上第1号古墳のある甲田町は、広島県のほぼ中央、広島市から北東へ約50kmの位置にある。町域は、可愛川（江川）とその支流戸島川によって開かれた山間の盆地（標高約200m）で、なだらかな丘陵が続く高原地帯であり、広大な果樹園と名産「高田梨」の産地として知られている。

甲田町の遺跡は、これまでの調査により計300か所以上が確認されている。特に古墳については戸島川東岸のなだらかな丘陵端部に、横穴式石室を内部主体とする小円墳が10～20基ずつ群をなして20数群が連なっており、横穴式石室墳の分布としては県内第一の分布密度を誇っている。しかし、この横穴式石室については現在までに発掘調査されたものではなく、災害あるいは盗掘により主体が明らかになったものである。この内には荒神古墳、戸島大塚古墳等の著名なものもある。荒神古墳は恩地古墳群に属する円墳で横穴式石室から金銅製刀装具、耳環、玉類など貴重な遺物を出土している。戸島大塚古墳は尾首古墳群に属する巨大な横穴式石室を内部主体とする古墳である。出土遺物は明らかでないが、石室は立石による区画をもち、切石状の整った石で構築しており、同じ横穴式石室でも前者とは様相を異にするようである。こうした大規模かつ整った石を用いる石室は、尾首古墳群以外でも二・三みられるといい、西に山を越えた吉田町域でも千川第1号古墳、塚ヶ峠第1号古墳等があり、当時この地域が一つの文化圏をなしていたことがうかがわれる。一方、こうした古墳群を構成する一般の古墳は、長さ3～5m、幅1m内外の小形の横穴式石室をもつものが多く、荒神古墳もこのグループに属するものと考えられ、同じ古墳群中でも内容に差があることがわかる。

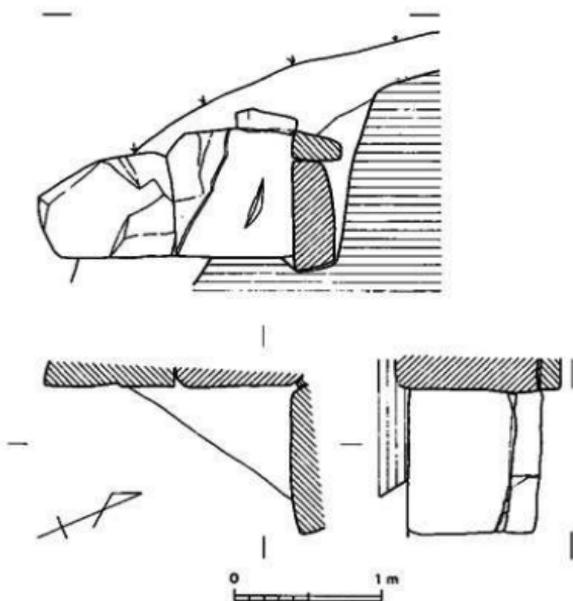
谷上第1号古墳は周辺の古墳群中では小形の石室をもつものと考えられるが、戸島川西岸では全体として古墳の数が少なく、現在のところ切石状の大形石室をもつものは知られていない。なお、この古墳の周辺では内長見古墳群、山田古墳群、中山古墳群等、箱式石棺を内部主体とするものもみられ、横穴式石室を中心とした戸島川東岸の古墳群とはやや様相を異にするようである。

### Ⅲ. 遺 構

本古墳は横穴式石室を内部主体とする。丘陵緩斜面に位置し、墳丘はほとんど明確にし得ない。調査時において石室は大半崩落し奥壁と西側石の一部、床面は北西コーナー部分が僅かに残るのみであった。

石室の主軸はほぼ南北方向とみられ、現存する規模は玄室の奥壁幅1 m、西側壁1.7 mを測る。石室は地山である花崗岩風化土を掘込み基底石の設定部分のみさらに深く掘込んだものである。石材は面の揃った約1 m四方の石を使用し広口積に構築している。また玄室の基底ラインは北西コーナー部分でほぼ90°を測り端正なコの字形を呈したものと推定される。

床面はほぼ水平であり地山土を叩き締めたのみのもので、この床面残存部に須恵器が敷き詰められた状態で検出された。



第2図 谷上第1号古墳石室実測図

## IV. 遺 物

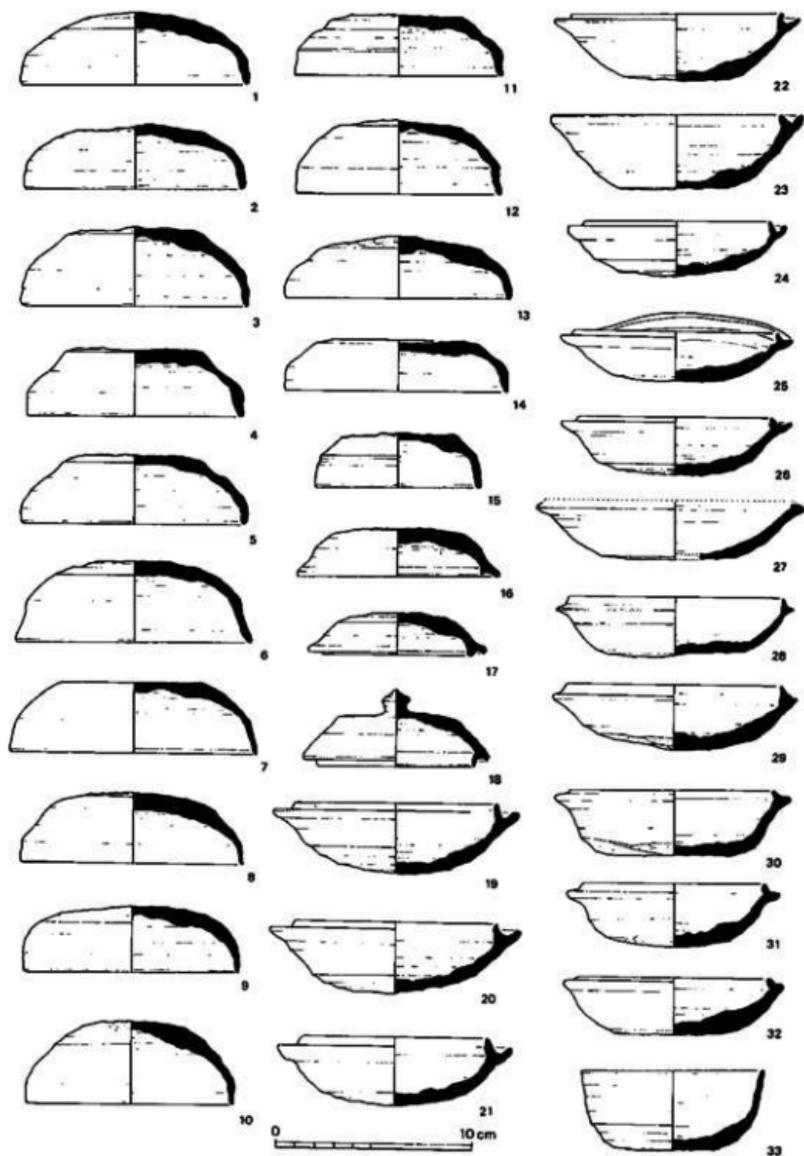
谷上第1号古墳出土の遺物は須恵器の各器種50点、土師器碗1点が出土し、他の遺物は採集されていない。須恵器の器種は、蓋（杯蓋、短頸壺蓋）杯身、短頸壺、罍、台付長頸壺、碗、高杯、平瓶、提瓶、横瓶、甕である。（第3～5図）

- 杯蓋（<sup>フナフツ</sup>1～14, 16～18）1～14は口径10～12cm前後、器高4cm前後を測る杯蓋。16～17はかえりを持つ小形の杯蓋。18は宝珠つまみをもつ杯蓋。
- 短頸壺蓋(15) 15は34, 35とセットをなすと思われる短頸壺(埴形土器)の蓋。
- 杯身（<sup>フキミ</sup>19～33）19～32は口径10cm前後、受部径13cm前後、器高3～4cmを測る杯身。33は18とセットをなすと思われる杯身。
- 短頸壺（34～39）34～36は小形のもの、37～39は中形のものである。
- 罍（<sup>ハツク</sup>40～42）体部は球形に近く、ラッパ状に開口頸部をもつ。
- 台付長頸壺（43）外開きの脚部をもち、球形の体部を有す。
- 碗（44）体部に1対の円孔透しを有し、特異な器形をもつ。
- 高杯（<sup>タカツキ</sup>45, 46）口径12cm前後の小形の無蓋高杯。
- 平瓶（<sup>ヒラベ</sup>47）球形の体部の中心よりややそれて短い口頸部をもつ。
- 提瓶（<sup>サツベ</sup>48）いわゆる水筒形を呈するもので退化した1対の把手をもつ。
- 横瓶（<sup>ヨコベ</sup>49）俵状の体部の上端中心に短い口頸部をもつもの。
- 甕（<sup>ウツ</sup>50）中形品である。
- 土師器碗（51）体部内面に中心より外方に向かって放射状に暗文（ヘラ先端によるミガキ痕）が認められる。

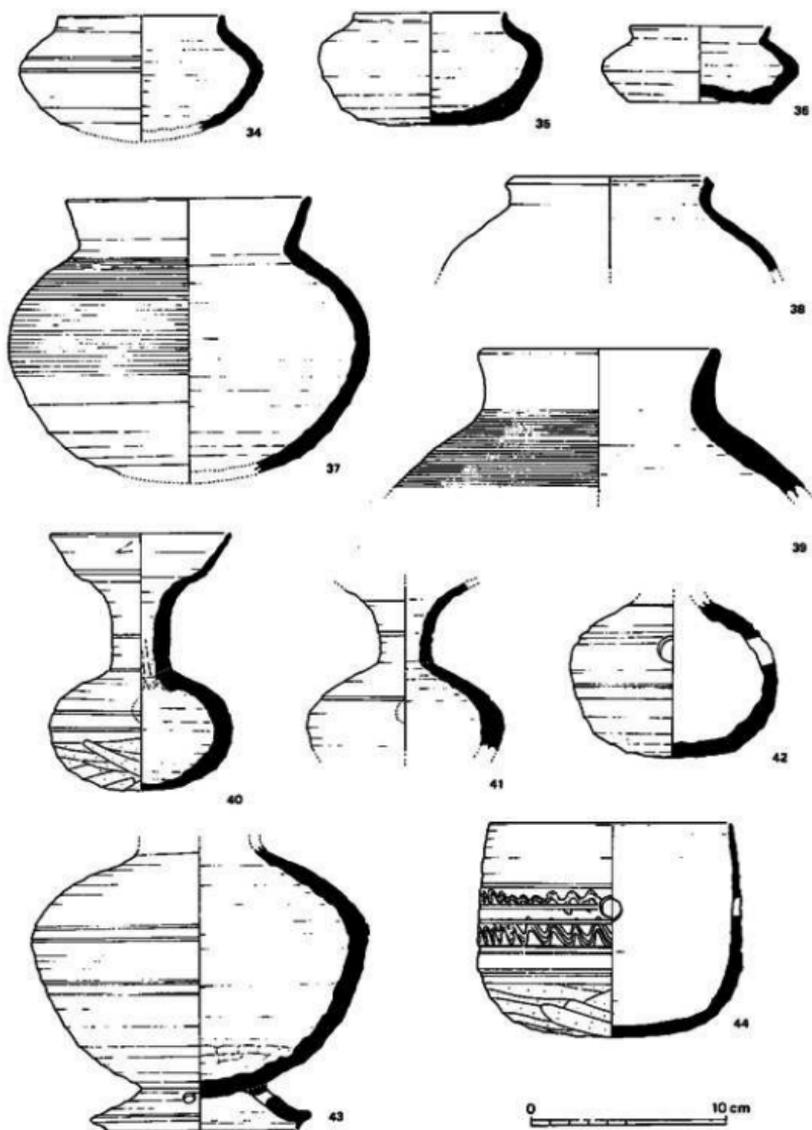
これらの出土遺物のうち須恵器の杯蓋、杯身類は大まかな形態としてA、Bに分かれる。A形態は図示した杯蓋1～14にみられるように口縁部内面にかえりのつかないもの。杯身19～32にみられるように受部及びたちあがりが付くものに代表される。B形態は杯蓋16～18にみられるように口縁部内面にかえりのつくもの、杯身33にみられるように口縁部が単純に終わるものに代表される。これらA、B形態は整形技法、調整によりさらに細分は可能であるがここでは二形態に大別した。

特に第3図44に示した碗は特異な形態を有し類例の乏しいものである。

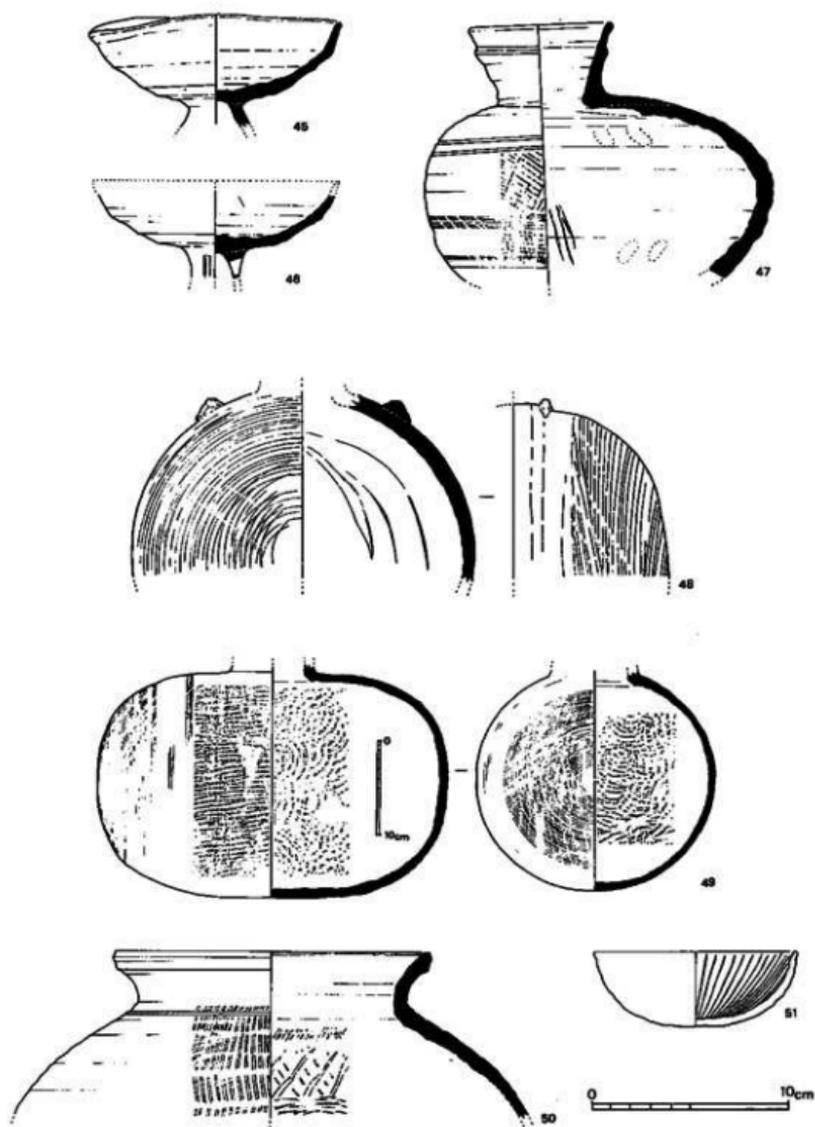
（各遺物の詳細は観察表を参照されたい）



第3图 谷上第1号古墳出土遺物実測図(1)



第4图 谷上第1号古墳出土遺物実測図(2)



第5图 谷上第1号古墳出土遺物実測図(3)

谷上第1号古墳出土遺物観察表 [単位はcm ( )は復元数値]

番号	器種	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1	須恵器 杯蓋	口径 11.7 器高 3.9	天井部は丸味をもち口縁部に移行する。口縁部は直線的にのび若干外開き気味である。口縁端部はやや丸味をもって終わる。	天井部外面約1/4回転ヘラ削り。他は回転ナデ。内面は回転ナデにより凹凸を呈し、仕上げナデが認められる。	胎土 砂粒多含 焼成 堅緻 色調 灰色
2	◇	口径 11.3 器高 3.5	天井部はやや扁平であり、口縁部に移行する。口縁部は若干外開き気味である。	天井部外面頂点を若干不定方向のヘラ削り。他は最終的に回転ナデ。内面は回転ナデ。	胎土 石英粒、白色粒子含 焼成 堅緻 色調 濃灰色
3	◇	口径 11.7 器高 4.2	天井部はやや扁平で巻き上げ痕を留め若干突出する。口縁部は外方に内湾気味にのび端部は丸い。	天井部外面を若干回転ヘラ削り。内面は回転ナデで凹凸を呈しマキアグ痕を留める。	胎土 白色粒子含 焼成 軟弱 色調 乳白色
4	◇	口径 11.0 器高 3.6	天井部は扁平で口縁部に向い不明瞭な段をもつ。口縁部は外方に開き気味で端部は丸い。	天井部外面を若干回転ヘラ削り。他は回転ナデ。内面は回転ナデにより凹凸が顕著。	胎土 白色粒子含 焼成 軟弱 色調 淡赤褐色
5	◇	口径 11.5 器高 3.6	天井部はやや扁平で口縁部に向い外湾する。口縁端部はやや直線気味に垂下し端部は丸い。	天井部外面1/4回転ヘラ削り。他は回転ナデ。内面には不定方向の乱雑なナデ	胎土 石英粒、砂粒含 焼成 堅緻 色調 淡灰色
6	◇	口径 12.1 器高 4.3	天井部はやや丸味をもち口縁部に移行する。口縁部は外方に開き端部は丸く内面に若干肥厚気味である。	天井部外面・回転ヘラ削り。他は回転ナデ。内面は回転ナデ。	胎土 石英粒、微砂含 焼成 堅緻 色調 淡灰色
7	◇	口径 12.7 器高 3.6	天井部は平坦面を形成する。口縁部に向って内湾しながら外方にのび口縁端部はやや尖り気味に終わる。	天井部乱雑なヘラ削り。他は回転ナデ天井部内面にマキアグ痕を留め乱雑なナデ。他は回転ナデ。	胎土 砂粒多含 焼成 軟弱 色調 外面 灰色 内面 淡褐色
8	◇	口径 11.4 器高 3.7	天井部はやや丸味をもち口縁部に向って内湾気味にのびる。口縁部は直線気味に垂下し端部は丸い。	天井部外面若干の回転ヘラ削り。口縁部一部縦方向のナデ。内面は回転ナデ及び仕上げナデ。	胎土 白色粒子含 焼成 堅緻 色調 濃灰色
9	◇	口径 11.0 器高 3.5	天井部は丸味をもち口縁部に向って直線的にのびる。口縁部はやや尖り気味に終わる。	天井部不定方向のゲズリか？他は回転ナデ。内面マキアグ痕をよく留め凹凸を呈す。	胎土 砂粒多含 焼成 軟弱 色調 淡褐色
10	◇	口径 10.6 器高 4.4	天井部はやや高く丸味をもつ。口縁部は直線的に垂下し端部はやや尖り気味に終わる。(短頸壺蓋か?)	天井部外面は不定方向のヘラ削り。他は回転ナデ。内面は丁寧な回転ナデ及び仕上げナデ。	胎土 石英粒、白色粒子含 焼成 軟弱 色調 淡褐色
11	◇	口径 10.6 器高 3.7	天井部は平坦面であり口縁部に移行する境界に段をもつ。口縁部は直線気味に垂下し端部は丸い。	天井部外面は回転ヘラ削りか？内面は丁寧な回転ナデ及び仕上げナデ。	胎土 精良、白色粒子含 焼成 軟弱 色調 淡赤褐色

番号	器種	法 規	形態の特徴	手法の特徴	備 考
1 2	+	口径 10.6 器高 4.0	天井部はやや丸味をもち高い。口縁部は直線的に外方にのびる。口縁部は強いナデにより屈曲し端部は丸い。	天井部外面は回転ヘラ削り。他は回転ナデ。内面は回転ナデ及び仕上げナデ	胎土 石英粒, 白色粒子含 焼成 やや軟弱 色調 淡灰色
1 3	+	口径 11.5 器高 3.6	天井部はやや丸味をもち口縁部との境に鈍い段をもつ。口縁部は下方に垂下し端部は丸い。	天井部外面横方向のヘラ削り。他は回転ナデ。内面は丁寧な回転ナデであるが、マキアグ度をよく留める。	胎土 砂粒多含 焼成 堅緻 色調 外面 灰色 内面 淡褐色
1 4	+	口径 11.4 器高 2.6	天井部は平坦で扁平である。口縁部は直線気味に垂下し端部は丸い。	回転ナデ及び仕上げナデ。	胎土 石英粒, 砂粒多含 焼成 堅緻 色調 淡灰色, 自然釉
1 5	須恵器 短頸壺 蓋	口径 8.5 器高 2.8	天井部は平坦で口縁部との境界に強いナデにより稜部をつくる。口縁部は若干外開き気味に垂下する。天井部内面は強いナデにより凹部を形成する。	天井部外面は回転ヘラ削り。他は回転ナデ。内面は回転ナデ及び仕上げナデ。	胎土 石英粒, 砂粒多含 焼成 堅緻 色調 濃灰色
1 6	須恵器 杯蓋	口径 10.4 器高 2.5 かえり径 3.4	天井部はやや平坦で口縁に向い斜め外方にのびる。口縁端部はさらに内外方に拡張し外方端部は丸い。内方に若干の拡張させかえりをつくり、端部は尖り気味。	天井部若干の回転ヘラ削りか? 他は内外面とも丁寧な回転ナデ。内面は仕上げナデ。	胎土 微砂含 焼成 やや軟弱 色調 灰色
1 7	+	口径 9.3 器高 2.3 かえり径 7.6	天井部はやや丸味をもつ。口縁に向って斜め外方にのび口縁端部はさらに外方に拡張させ端部は丸く終わる。内面に口縁より下方に突出するかえりを有す。かえり端部は丸く太い。	天井部外面・回転ヘラ削り。他は回転ナデ。内面は回転ナデ及び仕上げナデ。	胎土 石英粒, 砂粒多含 焼成 やや軟弱 色調 灰色
1 8	+	口径 9.5 器高 4.0 かえり径 8.0	高い天井部中央に麗宝珠状つまみをもつ。口縁に移行する部分はやや直線気味に外方にのび口縁端部は丸い。内面に貼付けと思われるかえりをもつ。	天井部平坦部分回転ヘラ削り。中央に麗宝珠を貼付け。他は内外面とも回転ナデ。	胎土 微砂含 焼成 堅緻 色調 淡灰色 自然釉付着 No.33 とセットか?
1 9	須恵器 杯身	口径 10.5 器高 3.7 受部径11.7	体部は内湾気味に外方にのび受部を形成し端部は丸い。受部内面に凹部をつくりたちあがりに至る。たちあがりは直線的にのびやや内傾する。	体部外面下半分回転ヘラ削り。他は回転ナデ。内面は回転ナデ及び仕上げナデ。	胎土 砂粒, 灰色粒子含 焼成 堅緻 色調 濃灰色
2 0	+	口径 10.3 器高 3.8 受部径13.0	体部は内湾気味に外方にのび受部を形成する。受部端部は丸く内面に凹部をつくりたちあがりに至る。たちあがりは垂直気味で断面三角形を呈す。	体部外面下半分・回転ヘラ削り。他は内外面とも回転ナデ。内面は巻上げ痕が顕著である。	胎土 石英粒子含 焼成 堅緻 色調 濃灰色

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
21	*	口径 9.5 器高 3.6 受部径13.0	体部はやや丸味をもちながら内湾する。受部は外上方に拡張させ端部は丸く、内面に凹部をつくりたちあがりに移行する。たちあがりはやや内傾気味で断面三角形形状を呈す。	体部外面下半・回転ヘラ削り。他は内外面とも回転ナデ。	胎土 石英粒、砂粒多含 焼成 堅緻 色調 淡灰色
22	*	口径10.9 器高 3.5 受部径12.6	扁平な底部をもち体部は斜め上方に直線的にのびる。受部は外上方に拡張させ端部は細く丸い。内面に凹部をつくり外上方にのびるたちあがりに移行する。	底部下半を若干回転ヘラ削り。他は回転ナデ。内面に仕上げナデ。たちあがりは折込み手法か？	胎土 微砂含 焼成 堅緻 色調 濃灰色
23	*	口径 11.0 器高 4.0 受部径13.0	扁平な底部をもち体部は内湾気味に斜め上方にのびる。受部は外上方に直線的にのび端部は丸い。たちあがりは内傾し、端部は受部高と等しい。	底部下半を若干回転ヘラ削り。他は回転ナデ。	胎土 白色粒子、石英粒含 焼成 軟弱 色調 乳白色
24	*	口径 9.6 器高 11.2 受部径 3.0	丸味をもつ体部から内湾しながら外上方にのびる。受部は斜上方にのび端部は丸く細い凹部を形成する。たちあがりは内傾し直線的である。	体部下半・回転ヘラ削り。他は内外面とも回転ナデ及び仕上げナデ。たちあがりは折込み手法か？ろくろ回転左方向。	胎土 砂粒多含 焼成 堅緻 色調 淡黄色 自然釉
25	*	口径 10.5 器高 2.6 受部径11.9	扁平な浅い底部をもち、体部は斜外上方にのびる。受部はさらに外方に拡張し浅い凹部を形成し短いたちあがりに移行する。	底部下半一部回転ヘラ削り。他は内外面とも回転ナデ。内面に仕上げナデ。たちあがりは折込み手法か？	胎土 微砂含 焼成 堅緻 色調 淡灰色 焼けひずみ大
26	*	口径 10.0 器高 3.0 受部径11.9	底部はやや丸味をもつ。体部は斜外方に直線的にのび、受部は外方に水平にのびる。内面に凹部を形成し短く内傾するたちあがりに移行する。	体部下半を回転ヘラ削り。底部外面は不定方向のケズリが若干認められる他は内外面とも回転ナデ。内面に仕上げナデ痕。たちあがりは折込み手法か	胎土 微砂含 焼成 やや軟弱 色調 淡灰色
27	*	口径(12.8) 器高(3.3) 受部径13.8	扁平な底部をもち体部は斜め上方に直線的にのび、受部との境界がやや不明瞭。	底部一部回転ヘラ削り。一部不定方向の削りか。他は内外面とも回転ナデ。	胎土 砂粒含 焼成 軟弱 色調 淡赤褐色
28	*	口径 11.0 器高 3.1 受部径12.2	扁平な底部をもち、体部は内湾気味に斜上方にのびる。受部付近は強いナデにより屈曲し水平に張り出す断面三角形形状の受部と内傾するたちあがりを一氣に形成する。	底部は回転ヘラ削りか。一本びき手法による。	胎土 微砂、白色粒子含 焼成 軟弱 色調 淡赤褐色
29	*	口径 11.1 器高 3.4 受部径12.7	底部は丸味をもち体部はそのまま外上方に内湾しながらのびる。受部は外方に若干水平に拡張され、内傾するたちあがりを一氣に形成する。	底部外面は不定方向のヘラ削り。他は内外面とも回転ナデ。一本びき手法による。	胎土 砂粒多含 焼成 堅緻 色調 淡黄灰色

番号	器種	法 量	形態の特徴	手法の特徴	備 考
30	+	口径 10.4 器高 3.4 受部径11.1	底部は扁平で平坦面を成す。体部は斜上方に若干外反気味にのび水平に張り出す受部を形成し、受部端部は丸い。たちあがりは短く内傾し端部は丸い。	底部外面は不定方向のヘラ削り。他は回転ナデ。内面に仕上げナデ。一本びき手法か。	胎土 砂粒多含 焼成 軟弱 色調 内面 淡赤褐色 外面 淡灰色
31	+	口径 9.5 器高 3.4 受部径11.0	底部は丸味をもち体部はやや内湾気味にのびる。水平に拡張された受部の端部は丸く、たちあがりはやや内傾し短い。	底部外面は不定方向のヘラ削り。他は丁寧な回転ナデ。内面に仕上げナデ。	胎土 精良、微砂含 焼成 やや軟弱 色調 内面 淡褐色 外面 淡灰色
32	+	口径 10.0 器高 3.0 受部径11.4	底部はやや扁平な体部は内湾気味に外方にのびる。受部は水平に外方にのび端部は丸い。受部は内面に若干の凹部をつくりたちあがりに移行し、たちあがりは短く内傾する。	内面は丁寧な回転ナデ及び仕上げナデ。外面は回転ヘラ削りか。	胎土 石英粒、砂粒多含 焼成 軟弱 色調 内面 淡赤褐色 外面 淡灰色
33	+	口径 9.4 器高 4.2	底部は扁平で平坦である。体部は斜上方に直線的に長くのび深い。口縁部は強いナデにより屈曲し端部は丸く終わる。	体部外面下半・回転ヘラ削り。他は回転ナデ。内面に仕上げナデ。ろくろ回転左方向。	胎土 石英粒、白色粒多含 焼成 堅緻 色調 灰色
34	須臾器 短頸壺	口径 8.5 最大径12.5	体部はよく張り出し逆「く」の字状を呈する。口縁部は垂直方向に短くのみ端部は丸い。体部中央に二条の沈線をもつ。	体部外面下半回転ヘラ削り。他は丁寧な回転ナデ。	胎土 白色砂粒含 焼成 やや軟弱 色調 内面 淡褐色 外面 淡灰色
35	+	口径 7.9 器高 6.0 最大径11.5	最大径を体部上半部にもち、底部はやや平坦である。口縁部は垂直方向に短くのみ端部は丸い。	体部外面下半回転ヘラ削り。一部縦方向のケズリ。内面回転ナデ。よくマキアゲ痕を留める。	胎土 石英粒、砂粒含 焼成 堅緻 色調 灰色
36	+	口径 7.1 器高 4.1 最大径10.1	底部は扁平で体部は斜め上方にのび体部中央で「く」の字状に内方に折れる。口縁部は上方に短くのみ端部は丸い。	体部外面中央下半全て回転ヘラ削り。内面底部不定方向のヘラ状工具によるかき取り痕あり。	胎土 砂粒、石英粒含 焼成 軟弱 色調 淡灰色
37	+	口径(12.5) 最大径 (18.5)	体部最大径を中央にもち球形を呈す。体部は丸く内湾しながらのび、「く」の字状に外反する口縁部をもち口縁端部は丸い。	体部外面上半カキ目、下半カキ目の後回転ヘラ削り。内面回転ナデ。口縁部は内外面とも回転ナデ。	胎土 石英、砂粒含 焼成 堅緻 色調 淡灰色
38	+	口径(10.0)	体部は内湾しながら内方にのび、口縁部は短く垂直気味にのびる。口縁端部は外方に横をもちさらに内傾し、内面に若干肥厚し凹部を形成する。	内面回転ナデ。他は不明。	胎土 砂粒、黒色粒子含 焼成 軟弱 色調 乳白色

番号	器 種	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
39	+	口径(12.0)	体部は内方にのび、口縁部は垂直気味にのびる。口縁端部は丸く器壁は厚い。	体部カキ目。口縁部内外面とも回転ナデ、体部内面回転ヘラ削りか。	胎土 砂粒、石英粒含 焼成 軟弱 色調 乳白色
40	須恵器 群	口径(9.2) 器高 13.6 最大径 (9.4)	やや扁平な球形の体部をもち、中央より円筒状の細い頸部をもつ。口縁部はラップ状に開き、頸部との境界に一条の沈線をもつ。	体部外面下半不定方向のヘラ削り。他は回転ナデ。頸部接合部は指頭によるおさえか。	胎土 微砂含 焼成 やや軟弱 色調 淡茶褐色 口縁部にヘラ記号か。
41	+	最大径 (10.1)	玉葱状の体部に、頸部の短いラップ状の口縁部をもつものと思われる。体部上半を頸部中央に一条の沈線をめぐらせる。	体部下半回転ヘラ削りか。他は回転ナデ。	胎土 精良、微砂含 焼成 堅緻 色調 淡灰色 自然軸かか。
42	+	最大径10.6 円孔径 1.4	球形の体部をもち中央やや上半に円形スカシ孔をもつ。体部上半は強いナデによってつくられた幅広い条線をもつ。	体部外面下半回転ヘラ削り。上半一部ヘラ削り。他は回転ナデ。	胎土 白色粒子含 焼成 軟弱 色調 乳白色
43	須恵器 合付長 頸壺	最大径17.3 脚径 11.3 脚円孔径 0.5	体部最大径を中央やや上半にもち、体部は内湾しながらのび中央付近で逆「く」の字状に内傾する。底部に八の字状に開く低い脚部をもち、脚端は一旦外方に拡張したのち、かえり状に内方に折れる。体部との境界付近に不定方向の3方の円形スカシをもつ。	体部外面下半回転ヘラ削り。脚台外面は回転ナデ。体部内面上半は回転ナデ下半は底部付近半円状の深いタタキにより台部との接合を強化する。脚部スカシは外方より円孔を穿ち内面の粘土はみ出し部を丁寧にカキ取っている。	胎土 精良、微砂含 焼成 堅緻 色調 淡黒褐色 自然軸及び灰かぶり。
44	須恵器 碗	口径(12.4) 器高 11.3 最大径13.5 円孔径 1.1	底部は平坦部をもち体部はほぼ垂直に上方にのびる。口縁部付近はやや内傾する。口縁端部の器壁は薄くシャープであり若干尖り気味である。体部中央に相對する箇所に対の円孔スカシをもつ。体部中央に不明瞭な沈線をもち区画された内に波状文を付加する。	体部外面下半不定方向のヘラ削り。他は回転ナデ。波状文付加のち円孔をあける。	胎土 石英粒、砂粒多含 焼成 やや軟弱 色調 淡灰色
45	須恵器 無蓋高 杯	口径 13.0	体部は斜上方に内湾しながらのび口縁部は若干外開き気味である。脚部は裾広がりのものと思われる。焼けヒズミ。	体部外面下半・回転ヘラ削り。他は回転ナデ。脚部内外面とも回転ナデ。	胎土 石英粒、砂粒含 焼成 堅緻 色調 灰色
46	+		体部は外方上に内湾しながらのびる。脚部は3方向の細長いスカシをもつと思われる。		胎土 砂粒多含 焼成 軟弱 色調 乳白色

番号	器種	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
47	須恵器 平瓶	口径 7.4 最大径18.0	扁平な球形状の体部をもち中央よりやや離れた位置に漏斗状の頸部を付加する。口縁部は強いナデにより幅広い凹部をつくりそのまま口縁化している。口縁端部は丸くやや外反する。	体部外面下半カキ目のち格子目タタキ上半部回転ナデ。体部内面ヘラ状工具による粘土カキ取り。回転ナデ、指源による押圧ナデ。口縁部内外面とも回転ナデ。	胎土 砂粒、石英粒含 焼成 堅緻 色調 淡灰色 焼けヒズミ
48	須恵器 提瓶	最大径 (17.5)	扁平で三角形の把手をもつ。球形の体部をもつ。	体部外面ワカキ目、ワ回転ヘラ削りか。カキ目は同心円状、一部交差する。内面は回転ナデ、一部粘土はみ出しのカキ取痕。	胎土 精良、微砂含 焼成 やや軟弱 色調 乳白色 口縁部を欠く。
49	須恵器 横瓶	最大幅 (37.0) 最小幅 (24.0)	瓶形の体部をもち、上部中央に口縁部を付加する。	体部外面カキ目のち横位の平行タタキ。内面同心円状のタタキ。	胎土 砂粒多含 焼成 軟弱 色調 内面 淡褐色 外面 淡黒褐色
50	須恵器 甕	口径(16.0)	体部はゆるく内湾し、くの字状に外反する口縁部をもつ。口縁端部は若干外方に肥厚させ外部に稜をもつ。	体部外面、頸部以下縦位の平行タタキ。内面、頸部以下平行タタキ及び同心円タタキ。	胎土 砂粒、石英粒含 焼成 軟弱 色調 乳白色
51	土師器 碗	口径 10.5 器高 4.0	半球状の体部をもつ、体部は外方上にゆるく内湾し、口縁端部は若干外方に肥厚させ屈曲する。	外面ヘラ磨き。内面中心から外方へ向かう放射状の暗文を付加する。	胎土 精良、赤色砂粒含 焼成 やや軟弱 色調 淡赤褐色

## V. まとめ

横穴式石室を採用する古墳は甲田町内において、その数 300基前後と推定され、時代は古墳時代後半期（6世紀後半～7世紀代）である。この時代は全国的にも横穴式石室を内部主体とする小円墳が爆発的に出現する時期である。一方、広島県に目をうつすと当地域は県内でも有数の後期古墳密集地帯である。これらの古墳はそれ以前の古墳のあり方とは相違し一般的には共同体の階層分化によって生じた有力家父長層の家族墓としてとらえられている。

本古墳の石室の規模、遺物の出土状況が詳しくわからないのは残念であるが、当時の埋葬形態、風習を知る上で貴重な資料であることはまちがいない。

出土遺物は須恵器を中心としたものであり、これらの土器類は当時死者に対する供献的な意味をもち副葬されたものである。現段階での須恵器の型式と対比すると先に分類したA形態のものは中村浩氏編年のⅡ型式6段階、B形態のものはⅢ型式1段階に相当すると思われる。しかしながらこの型式設定は畿内「陶邑」での編年でありこれがそのまま安芸地方に当てはまるかどうかは十分検討されるべきである。これらの形態差は谷上第1号古墳出土須恵器の中でも古相（A形態）新相（B形態）を提示するものであり、この形態差が単に時期差を表すものではないがこの形態差を重視すれば上記のように若干の時間差を考慮することが可能であり追葬が行われたことを示唆するものであろうか。

いずれにしろ谷上第1号古墳の被葬者は当地域、可愛川上流域の沿岸に後期古墳を連鎖状に出現させた一成員であり、可愛川支流に開けた小谷を生産基盤として培われ成長した姿をみることができ、その時代は7世紀前半と考えられる。

### 註

1. 甘粕健「古墳時代の展開とその終末」『日本の考古学』V. -古墳時代（下）-

河出書房 1966年

2. 中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1981年

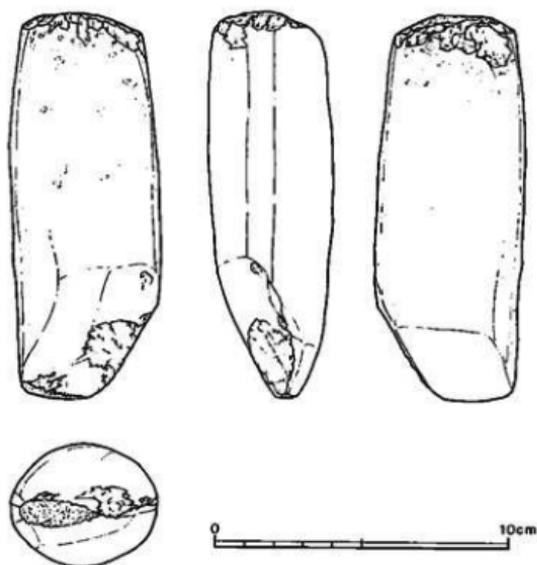
## 付編

### 谷上第1号古墳周辺出土の石斧

本報告の谷上第1号古墳の位置から西方約20mの丘陵斜面で出土したものである。石斧は現状で最大長13.4cm、最大幅5.1cm、最大厚4.3cm、重量493gを測り、淡乳緑色を呈する変成岩と思われる石材を使用している。基部は円柱状を成し、基端部は平坦面に近く、敲打痕が集中し潰れ状となっている。また刃縁部の一方には敲打痕が集中し幅約1cm程の平坦面を有しており、顕著な偏刃を呈している。この偏刃となる刃縁部及び刃面の一方には使用もしくは刃部再成時のものと考えられる剝離痕がみられる。研磨痕及び擦痕の状況についてみれば、基部には入念な縦方向の研磨痕が看取され、刃縁部から刃面にかけては表裏とも同一方向のやや斜位の擦痕が認められる。

以上、本石斧の刃部の形態は不明であるが、刃面の再成状況から考え使用に際して刃面の一方が大きく破損した事が考えられ、その破損面側の刃面を再成し縦斧として使

用され、最終的には刃部を再成せず敲打具としても使用されたものと考えられる。正確な所属時期は不明である。

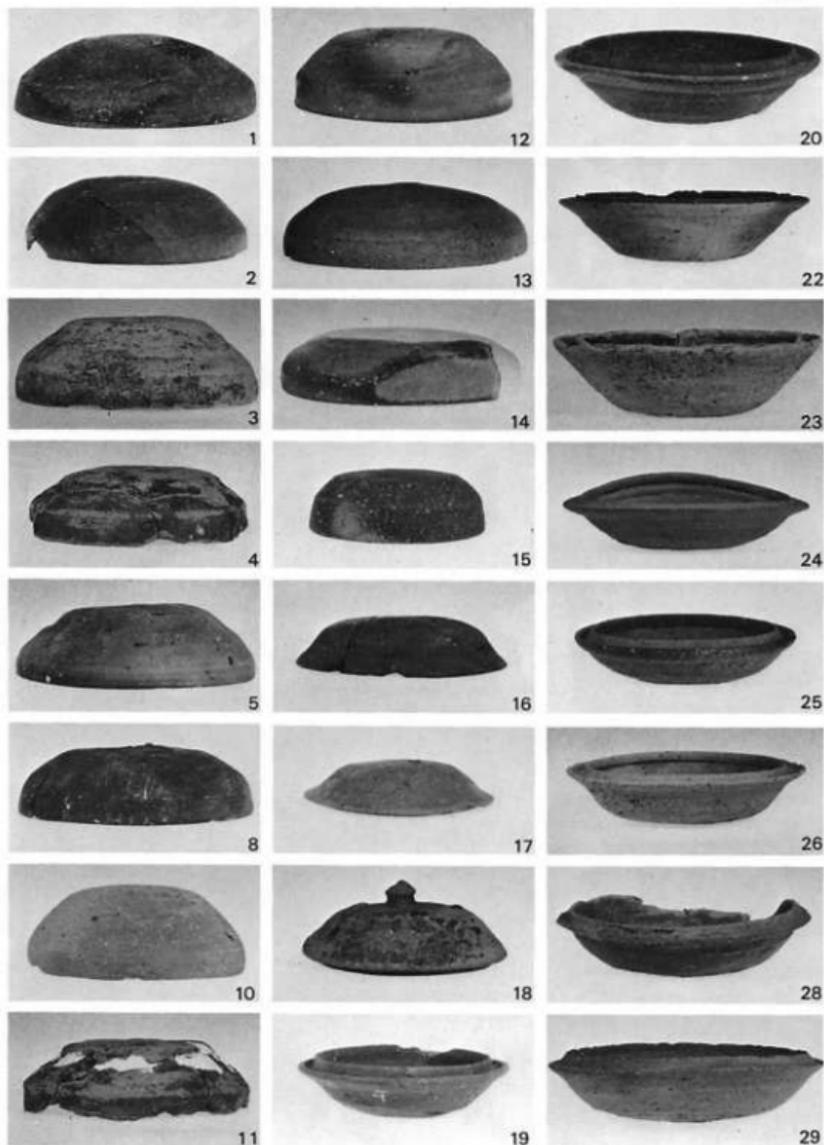


谷上第1号古墳周辺出土石斧実測図

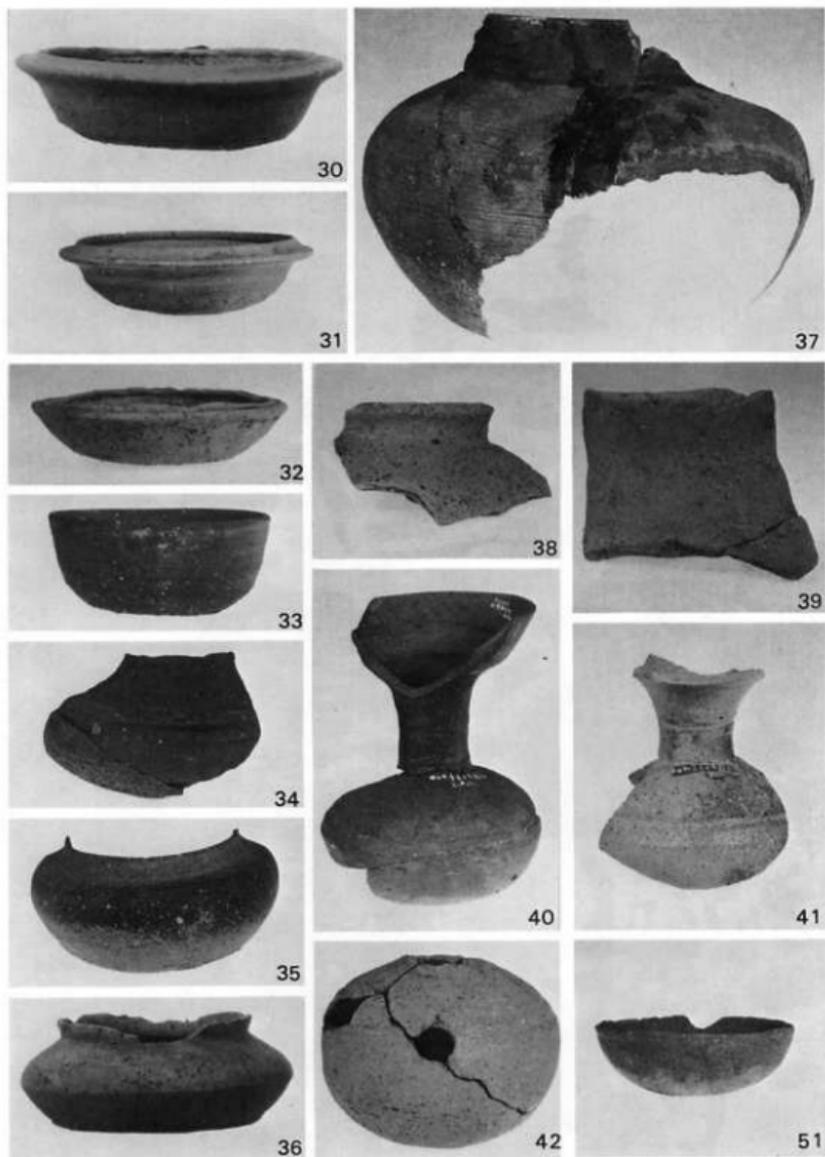
# 圖 版



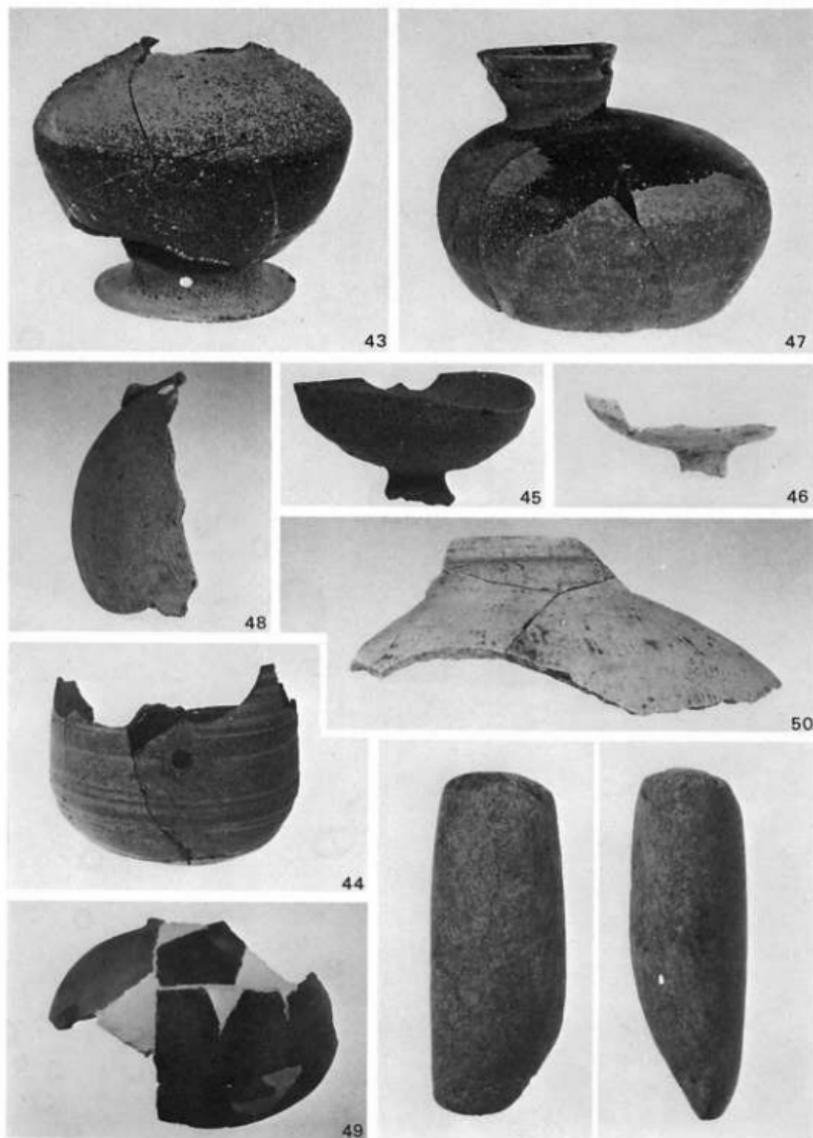
(上) 谷上第1号古墳遠景 (下) 第1号古墳石室全景



谷上第1号古墳出土遺物 (1)



谷上第1号古墳出土遺物(2)



谷上第1号古墳出土遺物(3)及び古墳周辺出土土石斧

昭和58年3月

谷上第1号古墳緊急調査概報

編集 広島県教育委員会

発行 広島県教育委員会

甲田町教育委員会

印刷 至誠堂印刷株式会社